

二  
一  
〇  
本

## 概要

筑波大学中央図書館に帰属される宮本蔵書には五冊続きの筑波大教育錦絵が収蔵されている。そのうち筑波大番号「 $\times$  950 210 宮本」、宮本文庫目録番号「大日本物産圖會、廣重筆 明治十、一帖  $\times$  950 210」は、旧蔵者である宮木氏によって『大日本物産図絵』という共通の主題で収集・編纂された明治浮世絵である。

本作品は明治十年に三代広重によって制作され、大倉孫兵衛が刊行した揃物の錦絵作品である。大錦一枚摺り形式で上下二図ずつ描かれ、北海道と千島を組んで一図とし、全国七十五箇の諸物産を各二図ずつ、計一五〇図描いている。筑波大にはこのうち三十二枚六十四図が納められている。筑波大本では上下段で一枚の大錦を台紙に糊付けして和装本形式に綴じているが、上下段を中央で切り離して横中版の絵を横につなぎ、折本に仕立てたものもあり、大倉書店の蔵版目録によれば折本は全六冊であったとされる。

『大日本物産図絵』が出版された明治十年には、上野公園において第一回内国勸業博覧会が開催されており、本作品もこの博覧会に出品・展示され、また、出品作品と同版のものが土産物として制作や販売がされて好評を博したことが当時の記録より分かっている。

また、筑波大学の他に、国立国会図書館、国立資料館、船橋市立図書館、函館市立博物館等の複数の館に『第日本物産図絵』の所蔵が確認されている。このうち、国立国会図書館本は昭和五十四年（一九七九年）に光彩社より復刻版として限定出版されたものであり、横中版を倍に拡大カラー印刷した全一〇〇図を収蔵している。国立資料館本の保存形式は不明であるが、一九八九年の時点で全一五〇図のうち一三〇図が確認されている。船橋市立図書館本は折本形式の三冊本の錦絵集であり、函館市立博物館所蔵本は「北海道函館氷輸出之圖」

一枚である。いずれも製本形式や図版順序が異なっており、刊行当時の形式を留めたものはない。

各版の形式を見てみると、いずれも上下に中版二図を納め、各図は縦一八・〇cm×横二五・六cmの竹を模した黄色と黒の枠の中で囲まれている。図の上方左右いずれかに巻物形式の冊が設けられ、縦書きの各画題と詞書に併せて『大日本物産圖會』と入っている。また、各大錦の下段右わき縦冊中の「出版人日本橋通一丁目十九番地大倉孫兵衛」、上段の右下わきの墨書き風の「広重筆」、下段の左わき冊中の「画工大鋸町四番地安藤徳兵衛」の記載は全版共通である。色彩や画題については、明治期錦絵に特徴的なように、アニリン紅やペロリン藍といった輸入顔料が多用され、一部の画面に洋装の人物や時代を反映するような事物が扱われている。

筑波大本は前述のように、旧蔵者の宮木宥式氏によって収集、編纂されており、その収蔵形式や図版の順序は正式なものではない。表紙の外寸は縦三十九cm×横二十五・二cmであり、表紙の厚紙には白地に藍染めの唐草文様と鳥が描かれた木綿布が貼られているが、裏表紙の布の上下は逆天地となっている。縦三十五cm×横二十四cmの和紙を右から六・六cmの部分で横につなぎ合わせた台紙に各大錦が糊付けされ、袋とじに綴じられている。多くの大錦版が、「画工大鋸町四番地安藤徳兵衛」の冊と「出版人日本橋通一丁目十九番地大倉孫兵衛」の冊のところで切断されており、冊の枠が切れているものも多数ある。加えて、全版において、「広重作」の字の右端が切断され、上段と下段の間には左右両端に裁断用の墨線が約五・五cmずつ設けられ、左右の墨線のいずれかには「宮木宥一庫」（以下「宮木印C」）の緑字方形印が捺されている。保存状態は決して良いとは言えず、黴跡や虫食いが目立つ。また、台紙への糊付けも乱暴であり、皺や波打ちが全面に共通して認められるものである。

表紙見返しの上白紙部分には、所蔵先を示す印章が複数捺されている。見返し

の左上、見開き中央部には「東京文理科大学附属図書館図書之印」（以下「文理科印」という一行四文字、縦四行からなる朱字方形印が捺されているが、印の中央部分の文字は朱肉が薄く、判読できない状態である。「文理科印」の下方、見返しの左下、見開き中央部には「寄附宮木」（以下「宮木印B」という縦書きの朱字印が捺される。さらにその下方には、「宮木蔵書」（以下「宮木印A」の朱字縦書き楕円印が捺される。そして、その楕円印の右の黒字重圍楕円印には「宮木有式氏ヨリ寄付／登艦和13182号／昭和12年1月8日」と横書き三行で記される。さらに、それらの印の最下部、見返しの左下には、横書きで「8015218」、見返しの右上には横書きで「54まい」と鉛筆書きされる。また、第一頁に捺印されている「宮木印C」が見返しの右端中央に色移りしている。見返し自体は紙が茶色に変色し、その右上隅には微跡が認められる。また、本体は四帖目の表と裏にて完全に二分され、各々の帖の接合部分も分離しかかっている。最も切断が激しいのは、表表紙見返しと第一帖目の切片で、約二十二cmに及ぶ切込みが入っている。裏表紙見返しには印章等は認められないが、第十六帖目の赤と藍色が全体にわたって色写りし、左上角には大きく微の跡が残る。裏表紙の変はいずれも磨耗が激しく、台紙の厚紙が剥き出しになっている部分もある。また、右から約七cm、縦に二十cmにわたって朱肉が色写りしている。その一部より、それが表表紙に捺印された赤色円形印「52」であることがわかるが、重複して押されている理由は不明である。以下に、各頁について、詞書と調書を記載する。（浅野智子・杉谷香代子・大久保範子・岡春菜）

凡例

画題 上段

下段

- ① 何帖目、裏・表
- ② 版数 上段・下段
- ③ 痛み、補修の状態
- ④ 印章の形状、位置
- ⑤ 暈し
- ⑥ 内容を簡潔に示す文章
- ⑦ 詞書 上段・下段

詞書については、判読不可能な文字は□をあてた。また、旧字体については現在の漢字に改めて記載した。改行部には／をあてた。

一、上段 肥前伊万里陶器造図一  
下段 肥前伊万里陶器造図二



- ① 一帖目 表
- ② 上段 十一版、下段 十二版
- ③ 画面全体に二・五・三cmにわたる波打ち。張り皺。上段枠右下、墨書縦書『広重筆』若干切断。下段枠外右下、黒字瓦版方形、右端枠切断。
- ④ 上下段中央、左墨線の右に「宮木有一章」の緑方形印。(以下「宮木印C」)
- ⑤ 上段は、地面の表現に一文字暈し、巻物型枠内に板暈し。下段は地面に一文字暈し、巻物型枠内と椀に板暈し。図の所々に説明書きがある。
- ⑥ 上段 肥前国にて伊万里焼き本釜の様子。下段 同国にて伊万里焼き絵付けの様子。
- ⑦ 上段

肥前国伊万里焼は本朝に尤上

／品

と□就中大河内三河内より出／る物上等□□焼物に用る土を／□上と伝て泉山より出て□性甚で／堅し拳のふを以て打ちき金杵／にて□をつき木彩とるして他の土／三種合せて池小漂しよく／和し□るを飯□にてこし、外の溜／池にうつしよく澄て浮くるのを／湯て素やきの釜にねりて乾し／再び清水に調和し粘和て工人に与ふ□など弟人の死□也

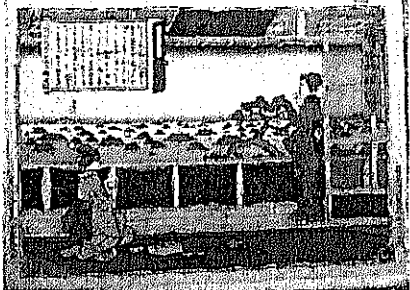
下段

□器を造るに形押□器の両／□ありといへとも円器を秀一の／用品とす先土に之尺□乃／穴を掘中に車を仕□けて車の中／に土を置車は足にて廻し両手を／以て上の土を押捧け指にて心の／□に器を作り陰干にして素焼の釜に入薪を用いて度量を／さらし火をけしてそのまま／さらし取りだして水にてあらひ／書面をかきて本釜へ入て焼／なり

二、上段 陸前國巻圖五

下段 同國松島景並埋木細工之圖

- ① 一帖目 裏
- ② 上段 十一版、下段 十一版
- ③ 画面全体に大きな波打ち。枠外左上部分、虫喰



- ④ 上下段中央、右墨線の左側に緑「宮木印C」
- ⑤ 上段は、空・夕日・地面に一文字暈し、枠内に板暈し。下段は、空・夕日に一文字暈し、水面と巻物型枠内に板暈し。
- ⑥ 上段 和服にたすきをかけた女達が、談笑しながら蚕の世話をしている所。
- 下段 小さな島が点在する、海の見える座敷の上で、二人の女がそれらを鑑賞している。画面奥に見える山に、「金台山」と書いてある。画面手前には、埋もれ木で作ったであろうと思われる盆が見える。

⑦ 上段

蚕生口出てより四度の居起あり／最初獅子の居起より鷹の眠／起舟の居起庭の眠に口右居起の二日目毎に尻取口口拵ハ／蚕に口口合せすしづあらく切て／箕にて埃を去り能口口にして／むらなく喰すべしすべて蚕ハ口口／飼にするをよしとす厚飼ふすれ／バ無視少さ口口してまめも少さしずい／ぶん沢山に口を口りせし蚕ハ大／ぶりにして意図の正味多しと云

下段

松島ハ日本三景の一塩竈より／舟路二里余左は磯つづき右ハ／海路にして島々の数を尽し後と／峙ち前に旬ひ或ハ向ひ口口ハ／う口口むきて松樹枝を伸屈／て其首尾を粧ふて風色最も濃なり又埋木ハ名取郡名取／川より産比ハ年久敷水中に沈／ミし木にて純黒或白斑ありその質は鳥木の如く多く硯管枝／折菓子皿其他種々の細工をなす

三、上段 陸中國養蚕之圖六

下段 陸中國牧牛之圖

① 二帖目 表

② 上段 十一版、下段 九版

③ 全体に大きく波打ち。版右辺の「広重筆」と出版人

版左辺の画工名の冊がいずれも枠を一部欠いている。「御届明治十年八月十日」の銘文あり。上下段中央、左から約十cmに緑色の色写り。左墨線の右「宮木印C」に、一帖目の同印が転写している。版の右上角に虫食いの跡。同左上角に茶色の染み。同左上辺に微の跡。下段の図中、右上の空には約1cmの緑の色飛び。

④ 上下段中央、切断用の左目安線の右側に緑「宮木印C」

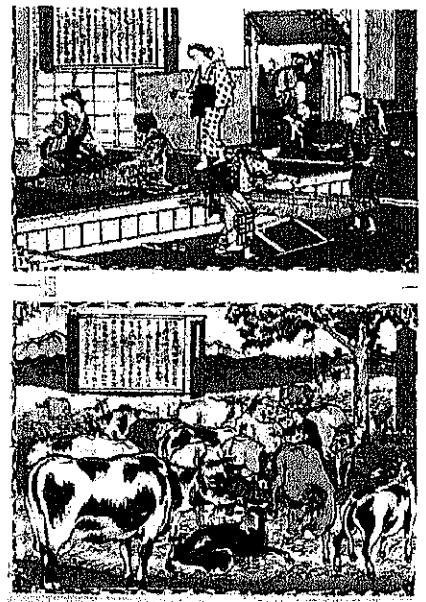
⑤ 上段の空には、青と赤の一文字暈し。右手奥の茅葺屋根の門に茶と緑の板暈し。また、その下の地面には茶と緑の板暈し。図中左上の巻物型の冊には赤の板暈しが用いられている。下段の空には、青と赤の一文字暈し。草原には緑の板暈し。また、その地面には茶色の板暈し。図中左上の巻物型の冊内には赤の板暈し。

⑥ 上段 陸中國において養蚕業の様子。

下段 陸中國において牛を放牧する様子。

⑦ 上段

蚕の繭をつくるに仕様ハ諸國にて違ひあり當國にてハ筵の縁を二寸ほど折立て中に口竹を／角ちがひに結付藁三四本口口を三角に折之を筵の中へ立並べ／此中へ蟄し蚕を口口と配り／入口暖の口処へあげ置て繭を／つくらすこれをあび口とも同状／ともいふ扱最初の口立口り／頃に至り誤て無忽できなバ今／迄のつよめ



忽ち水の泡と消へ漠／太の損毛に至る故に注意すべし

下段

牛ハ當國閉伊群をはじめ／南部其他諸群より産ずる／こと夥數年く之を嚮く／其一ト群口牛商四五人位に／て牛五六十疋綱をも付け口湊／來る駅路ハ多く夜中牽て／往來の礙をなさ口口を渡る／に小牛を俵の中へ入大牛の脊／に付船にのせて口口外の牛／ハ皆水底を口口涉り向の／岸へ上る口自在口といふ

四、上段 伊賀國磨砂

下段 同國石炭山之圖

① 二帖目 裏



色白き／を雪の如し其用銅□を磨／疊表を製するに用い／又□を節ひ香臭を和く／紅をさして齒磨薬を／製する□□□□し／□砂ハ白亞の□にして／粘なしといふ

下段

石炭ハ長野笠取兜よ□□／産す礦屬にして其色漆／の如し山中深く掘入て出／を金山とおなじ其用木炭／より火氣倍せるをもつて／蒸氣の力を用る物及び／金石を鍛鑄する物尽く／用ひざるなし又油を製し／て燈火に用ゆ

五、上段 丹後國網追網之圖

下段 同 網磯場之圖

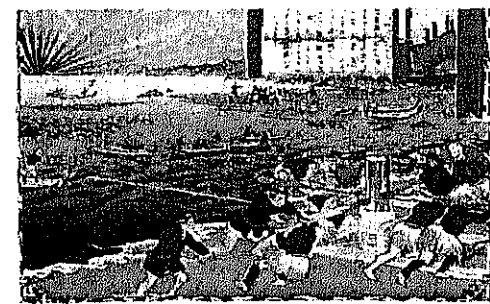
① 三帖目 表

② 上段 十版、下段 九版

③ 画面全体に大きな波打ち。張り鱧。枠外左上角より下へ四・五目所のから、一・二目にわたり、貼る際にめくれた様な欠損。

④ 上段枠右下、墨書縦書『広重筆』切断。下段枠外右下、黒字瓦版方形、右端枠切断。及び下段枠外左下、黒字瓦版方形画工印左端切断。

⑤ 上段は、空・海に一文字暈し、太陽・砂地・巻物型枠内に板暈し。下段は、海・



網磯場近くなるとき数百人／あつまりて網を引

下段

輪輻にて／ひ□□けるなり

時□□□□び追／網を以て捕る網ハラミの／入口に□り数千艘に□を／ならべ□をたき魚をおひ／いれ尚魚のもれざる□□三／重にあみをつけ

⑦ 上段

砂地・巻物型枠内に板暈し。

⑥ 上段 様式化された太陽を背景に、漁師達が鱧漁に励んでいる所。遠近を意識した構図である。

下段 大勢の漁師達が分担して大きな網を引き上げたり、獲れた鱧を浜辺へ放投げたりしている図

② 上段九版、下段八版

③ 画面全体に大きな波打ち。右上隅より左へ一・七cmのところより、左斜め下へ縦長の虫食い跡。右下隅に、縦方向斜めに切り取ったような欠損。上段枠右下、墨書縦書『広重筆』若干切断。下段枠外右下、黒字瓦版方形、左斜めへ切り取った様な欠損。一帖目と三帖目の接辺に約七cmの切れ込み。

④ 上下段中央、右墨線の左側に緑「宮木印C」

⑤ 上段は、空・地面・巻物型枠内に板暈し。下段は洞窟内部の組木・地面に一文字暈し、同じく洞窟内部の岩肌板暈し。

⑥ 上段 鉢巻をした男たちが、磨砂を山から採取している所。

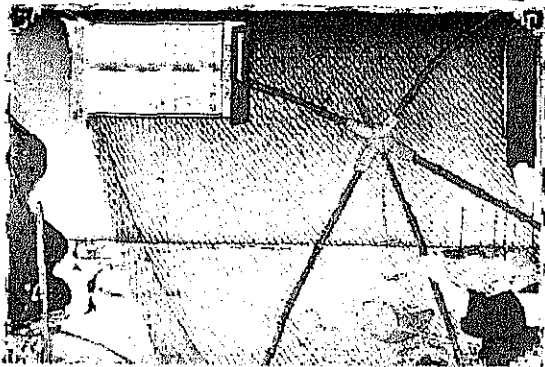
下段 腰にみのを巻き、背中にかごを担いだ男たちが、大きく掘られた洞窟内部で、石岩を採取している様子。

⑦ 上段

磨砂ハ山田郡長の山より／出す礦屬にして其

あげ網／中に□る魚を打鎗或□て／手とり  
にして砂上へ投あげ／腸をぬき大桶より□  
□□□／塩づけとなり又□□を／腸中に□□  
し土中より／うづミてむしろをふせて水気  
を去りふたたび／塩を□□し麩に包て／  
諸邦に出す

六、上段 備前岡山石筆製圖  
下段 備前國白魚漁之圖



① 三帖目 裏

- ② 上段 十一版、下段 十版  
画面全体に大きな波打ち。枠外左上角より下三cmのところに一部欠損。画面中央よりやや下の所に約五mmの青色の顔料の移り。さらにその右下に縦約一cmの黄色の移りあり。画面右下部分擦傷による顔料の剥げ落ち。枠外左下角より右へ一・二cmのところから約二cmにわたるカビの様な汚れ。さらにそこから右へ約一cm、三cmの所にも同様の汚れ
- ③ 上段 枠右下、墨書縦書『広重筆』切断。下段 枠外右下、黒字瓦版方形、右端枠、下にかかるにつれひどい擦傷。下段 枠外左下、画工印左端枠切断。
- ④ 上段は、水の表現に板暈し。下段は、水・空・火に板暈し、水面に一文字暈し。
- ⑤ 上段 石筆及び石版を作っている光景。和服に混じって洋服を着ている人物が一人いる。髪型も和、洋と混じっている。
- ⑥ 下段 漁師が網を広げて白魚を漁っている様子を描いた図。一面の空と海をバックに画面手前で漁師が大きな網を掲げるダイナミックな構図。遠近の対比を強く意識している。

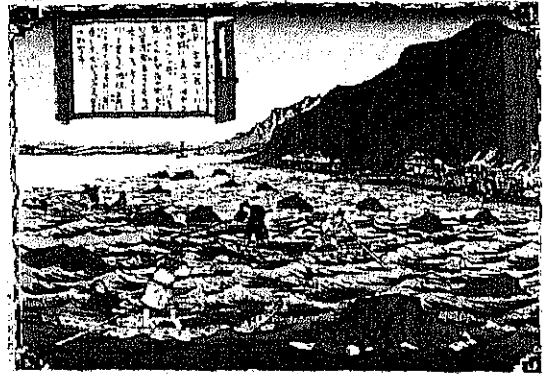
⑦ 上段  
富國和氣郡伊部近傍の山中より産する土石ハ／その質堅剛にして白色／たりこれを挽己り石筆／に製するに殆と舶来の品と比しきを以て専ら／これを用い依て

多く之／を製造して諸國へ輸／出なすといふ  
下段

七、上段 陸奥國真綿製之圖  
下段 同國津輕昆布採之圖

白魚ハ當國児島郡福ノ島の湊藤戸の渡し辺より産する小魚にして夜中／数多の漁船篝火を燒き／□網をおろして之を漁る／その景況陸より遠く望／む時ハ篝火海水に映し／宛ながら筑紫の不知火の如く／なりといふ網 にかかっている魚ハ／クマを以てとり干て他國へ出す

- ① 四帖目 表
- ② 上段 十一版、下段 九版  
画面全体に大きな波打ち。張り
- ③ 枠外下部、左部分を中心に、黒いカビの様な斑点群あり。上段 枠右下、墨書縦書『広重筆』切断。下段 枠外右下、黒字瓦版方形、右端切断。下段 枠外左下、画工印、左端切断。四帖目裏と完全に剥離。
- ④ 上下段中央、左墨線の右側に緑「宮木印C」
- ⑤ 上段は、空・川・丘に一文字暈し、地面と巻物型枠内に板暈し。下段は、空・夕日・海に一文字暈し、波間・山・巻物型枠内に板暈し。出版冊と画工冊が黄色に塗られている。
- ⑥ 上段 和服を着、日本髪にほっかわりをした女達



の／岩間の石に着て生じその／幅一尺に□ぎ長さ数丈に／い□る淡黄にしてその／邊り青黒なり□□□を／刈り干して他邦に出し／俗に煮て食□れバ面に／瘡を生ぜずといふ是古昔の和方なり

八、上段 信州蕎麥切製造之図

下段 信濃國氷中八ツ目繰採ノ図

⑦

⑤ 上段は、空・夕日・山肌・塗り壁・湯気・巻物型枠内に板畳し。下段は地面・巻物型枠内に板畳し。  
 ⑥ 上段 外に月が見える座敷の上で、ふすまを隔てて、ろうそくの火を灯しながら、職人たちがそばを作っている様子。の図。  
 下段 氷上で、男達が穴の間に綱やしかけを入れ、うなぎを採っている。画面右には、暖をとるための焚き火が見える。

上段

蕎麥ハ諸國に培養すといへども當國更科郡を名産／とす葉ハ三稜にして薄く／小白花をひらき三稜の実／をむすぶ初秋に種を下し／冬にい□りて刈りとり□にて／ひき殻を去り□ふるひに／うけて末粉となし湯に／て□ひら目にのへ□

① 四帖目 裏

② 上段 十一版、下段 十版

③ 画面全体に大きな波打ち。枠外右側、右上角より、下へ四・五 cm 位の所から、五 cm 程、下にかけて緑色の擦れた様な移り。

その下一 cm の所に、虫喰いによる細長い欠損。枠外下部、左下角より、右に八 mm の所から、右へ二・七 cm、同じく左下角より六 cm の所から、右へ二・二 cm にかけて、黒いカビの様な斑点群。枠外下部はば中央にも同様の汚れ。上段枠右下、墨書縦書『広重筆』切断。下段枠外右下、黒字瓦版方形、右端枠一部欠損。  
 ④ 上下段中央、右墨線左側に緑「宮木印C」

⑦

上段

が、小川のほとりで真綿を洗い、干している様子を描いた図。  
 下段 先端に鎌の様なものをついた長い棒を用いて、男達が小さな船に乗り、岩間をこぎながら、昆布を採っている図。

真綿ハ糸に取□□き悪／しき繭を撰出しこれを／上灰汁にてよく煮夫より／水に漬さらして灰汁を出し指にてひき延し引盤／にかけける也國々流□多し／夫より清水にて引のバし干／立る処あり又綿にて水に漬／さらす処もあり後三むしる或／ハ繩につりて干立るな

下段

昆布ハ當國北部今別及／び津輕辺より出づ海中





細ながくきり口で食用に／供す

下段

八ツ目鰻ハ信州諏訪の湖に採るものを名産とす／上下の諏訪一里計のあひ口／湖水氷にて張つめ口の上／に小家を営む漁夫の体／ふ所となし水上口薪／を積焚て所々の穴を穿ち／延縄に共餌を付て釣取を移シ／又手操網にて口魚を採る／口口し

九、上段 尾張國有松頼り之圖

下段 尾州名古屋扇折の圖

- ① 五帖目 表
- ② 上段 十版、下段 十版
- ③ 画面全体に大きな波打ち。紫色のインクの移りが広範囲に見られる。枠外右下角部分に、青いペンでつけられた様な、たてに縦に三つの小さな点と、二mm程の汚れあり。上段枠右下、墨書縦書『広重筆』若干切断。下段枠外左下、画工印、左端枠一部切断。上下段中央、左墨線右側に緑「宮木印C」



⑤ 上段は、空に一文字暈し、地面・夕日・下げられた浴衣・枠内に板暈し。下段は、空・夕日に一文暈し、枠内に板暈し。出版人冊、画工冊が黄色で塗られている。

⑥ 上段 たすきをかけた女達が、座敷に座り、談笑しながらしほりを作っている図。

下段 座敷の上で、女達が談笑しつつ、作業を分担して扇を作っているところ。

⑦

上段

鳴海頼りと称して愛知郡／有松にて多く産す織物／を鹿の子立しほハ口た／すきなるひハ雲竜竹よ虎の類種々画もやうを額口／藍紅とちにて染あげ／たるものにして最夫也／綿布を以て染たる口を／浴衣単衣ホにのちひ／ま口

布にて志ほり／たるものなり

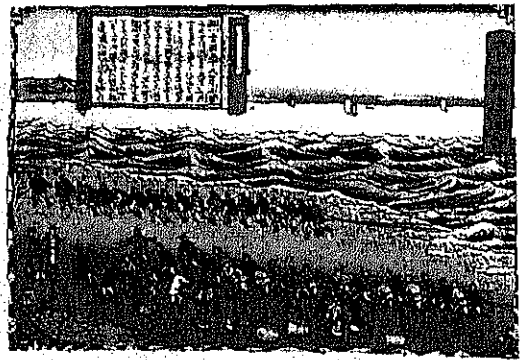
下段

扇ハ愛知郡名古屋口／て多く出し口口に名古屋扇の名あり支那製／に倣て薄竹骨にて造り／紙口を強る本骨ハ口口／竹朱丹口口象牙の口口に製し塗骨口口多／金銀のぞうがんを口口／鳥虫山水など雕刻して／最羨なり

十、上段 上総國九十九里蘆瀨之圖

下段 上総國蓮干網之圖

- ① 五帖目 裏
- ② 上段 九版、下段 十版
- ③ 画面全体に大きな波打ち。第八頁目の、枠外下部に見られた部分と、ほぼ一致した箇所、同様の黒いカビの様な斑点群あり。上段枠右下、墨書縦書『広重筆』切断。下段枠外右下、黒字瓦版方形、右端枠切断。下段枠外左下、画工印左端枠切断。
- ④ 上下段中央、右墨線左側に緑「宮木印C」が右に九十度回転して捺されている。
- ⑤ 上段は、空・夕日に一文字暈し、砂浜・波・巻物型枠内に板暈し。下段は、空・夕日・海に一文字暈し、波・巻物型枠内に板暈し。
- ⑥ 上段 人物が小さく描かれている。大勢の男達が網の先端と思われる紐を引っ張る図。



下段 大きく弧を描いた網の内側で、人々が魚を獲っている。

⑦

上段

鯉ハ當國九十九里の海濱にて十月頃より五月迄漁／するを尤も盛なり皆曳網なり魚の来るを口／んで磯辺口／三三三沖へ網を張るを五百尋より／七百尋に至る陸にて其綱を／曳口の凡二百余人浪の寄る／随ひて曳あげたるを持て魚／を口らひ磯辺に土手の如く／ツミ上ケ大漁とすハ皆干鰯／となし或ハ油を絞／り魚油とす

下段

當國望陀郡木更津海濱／より吾妻川尼の濱にて建／干網と口／なへて満潮のとき／沖へ出るを一里余

にして六尺／毎に杭を口／れへ網を

張廻ス／を凡一千尺志口／して潮の引／くに／従ひ口／辺の魚皆比網中二集／

口／漁人これをひらふ多漁の時／交魚／何千頭と云を志らず／又客ありて網

を求るとすハ／潮の引口／るとき其魚／を口／自／ら客にとらするそのさ口

東／京の潮干狩のごとし

十一、上段 安房國水仙花

下段 同國口／網之圖

① 六帖目表

② 上段 十三版、下段 十一版

③ 画面全体に大きな波うち。紫色

のインクによる移りが画面中／央から下にかけて広く見られ

る。上段枠右下、墨書縦書『広／重筆』若干切断。下段枠外右下、

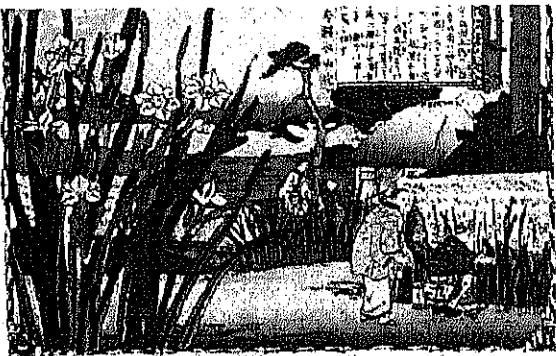
黒字瓦版方形に右端枠一部切／断。なお、上半分は擦傷あり。

④ 上下段中央、左墨線右側に緑

「宮木印C」

⑤ 上段は、空、夕日の表現に一文

字暈し、かやぶき屋根、地面に／板葺し。下段は、空、夕日に一



文字暈し、水に板葺し。巻物型の冊に赤の板葺し。出版人冊と画工冊が黄色で塗られている。

⑥ 上段 農村の風景。左手前に大きく水仙の花が配置された構図。

下段 浜辺付近で語らう人々の後ろの海でサンマを漁る漁船が小さく描かれている。

⑦

上段

安房ハ北 上総の山脈／連り東西南は海に接ス／故土地暖口なる口／もつて／水仙花秋の末より花／より口／海濱に自／生して最美貌なり四／葉一口／にして莖上口／花を開六瓣荷して清香／なり多く口／下に出し／て挿花に供す

下段

口／ハ安房郡布節村朝／口／郡千倉平館の浦々／

にて漁す季秋の頃より／＼<sup>サシアケレンア</sup>群集なすを□□  
 て百間／余の網を東西へひき／＼<sup>サシアミノナカ</sup>網中江へを  
 □□て岩を船へ／引あげ諸船ハ魚を採り／い□  
 塩□して東京に出／す大漁の□ハ一網十萬／よ  
 り廿万尾に至る

十二、上段 大和國葛根ヲ掘圖

下段 大和國葛之粉製圖

- ① 六帖目 裏
- ② 上段 九版、下段 十二版
- ③ 画面全体に大きな波打ち。画面中央十cmの所に  
 ○・二cmの擦傷。右上に一・八cm×○・七cmの  
 欠損。上段枠に赤染み。画面全体に大きな波打ち。  
 右下角に擦傷。右下文字帯○・一cm  
 の欠損。上段枠右下、墨書縦書『広  
 重筆』切斷。擦傷あり。下段枠外右  
 下、黒字瓦版方形、右端枠切斷。下  
 段枠外左下、画工印左端枠切斷。
- ④ 上下段中央、右墨線左側に緑「宮木  
 印C」
- ⑤ 上段は、空に一文字暈し。下段は、  
 夕日に一文字暈し、空に板暈し。出  
 版人冊と画工冊が黄色で塗られて  
 いる。巻物型の冊に藍の板暈し。
- ⑥ 上段 人々が葛の根を掘り出して  
 いる様子を描いた図。



⑦

下段 葛の根から葛粉を精製している所を描い  
 た図。

上段

葛へ山野に自然に出る蔓／草にして春旧芽より新  
 芽／を出し一莖三葉にして葉莖に／毛あり秋葉の  
 間より穂を／生じ花を開く豆の花に似／て紫赤色  
 なり後莖を結ぶ／その根うす紫にして肉／白色  
 なりこの根を冬より／春の発芽のときまで□／鶴  
 むしにてわりとり土を／あらひ石盤のうへにて打  
 砕／□し桶に□を入中にて／のこらずす□り

下段

□の□出したる汁を布の袋／に入れて絞り再び木綿  
 袋に入れて／□し一日の間静置して上ハ水を□の□  
 まりを乾し底に付し黒／き粉を削り又□シ桶に入

十三、上段 佐渡國金山之圖

下段 佐渡國金掘之圖

- ① 七帖目 表
- ② 上段十版、下段八版
- ③ 画面全体に波打ち、約三三cmの縦罫。下段枠外右  
 下に微痕、青の色移り。枠外下部、右下角より、  
 左へ一・一cmの所から、左へ二cm程にかけて、  
 黒いカビの様な斑点群あり。上段枠右下、墨書縦  
 書、『広重筆』若干切斷。下段枠外右下、黒字瓦  
 版方形、右端枠切斷。下段枠外左下、画工印、左  
 端枠切斷。
- ④ 上下段中央、左墨線右側に緑「宮木印C」
- ⑤ 上段は、山肌の表現に板暈し。下段は、洞窟内の  
 岩肌板暈し。巻物型の冊に藍の板暈し。
- ⑥ 上段 佐渡の金山を描いており、画中の所々に、  
 説明文がついている。
- ⑦ 下段 金山の洞窟内で金を採掘している様子を  
 描いた図。

／て□ませ沈殿するに志□ず／ひ上水をとりのぞ  
 く再三に及ひ／て乾かしたるを灰と布を□□／晒  
 □にいでて日に干しそれを／灰くすといふ□汁灰  
 くすを前／の如く水干するの七八□に／して後居  
 紙を交□るさらし／□に入日に干さるか□葛粉之

上段 皇國金を発見せしは／人皇四六代孝謙天皇の



十四、上段 越後國雪中布晒之圖  
下段 越後國鮭洲走を捕圖

① 七帖目 裏

② 上段 十一版 下段 十一版

③ 下段 右上人物周辺赤色のうつり。右下角3cm程の微による黒染み。下、右から六・六cmの部分に一・五cm程の微による黒染み。画面全体に波打ち。下段左上二人の人物の左横に点々と紫の色うつり。

④ 上下段中央、右墨線左側に緑「宮木印C」

⑤ 空に灰色と紫の一文字暈し。山に灰色の一文字暈し。文章部分紫の一文字暈し。水に青色の一文字暈し。地面緑の一文字暈し。画面の冊に藍の板暈し。

⑥ 上段 越後國の雪中で布を晒して  
いる図。

⑦ 下段 越後國の鮭を捕る図。  
上段

縮ハ越後國柏崎小千谷手ノ塩沢十日町より□□す物ハ皆ノ縞或ハ紺□□すり□□て島堀辺ノハ白縮を専らとし下谷辺にてノ草麻を多く養ふ草麻ハ麻に似てその葉桐のごとしノ

御宇始めて陸奥國より献ノ納すと云蓋し富國ノ諸郡より出口と どもノ就中雜太郎相川西見川ノ金北山より掘出すと最も夥しノ其出額年々□目余三至ノれり美に盛に□□海内第一也

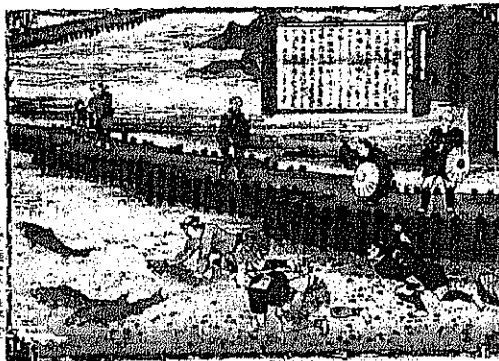
下段

金に砂金石金其外數種ノあり砂金ハ山谷土砂の中にノ生ちて又瓜子金 麩金としてノより精煉して熟金とノなす石金は岩石の間ノに混合して方言「シノラマサ」といふ人夫礦中ノの金脈をつくふて掘捕□□□なり

□刈とりて皮を剥石灰と糶ノ灰のおくにてさらし煎□ノ細に破き紡とうけて布にノ織り晒屋にさらさらしやノ又灰汁にてさらし降積雪にノ敷うさ子雪に□□□てさらすノ□□に白きるゆきのとし

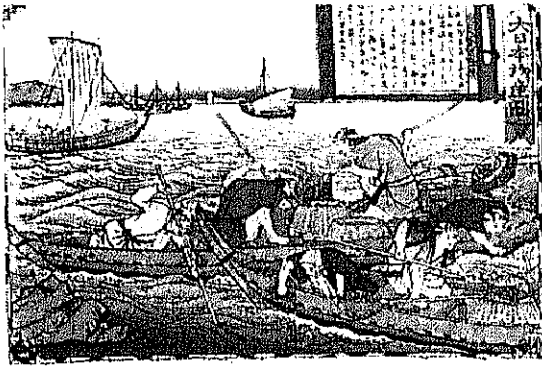
下段

當國の鮭ハ初秋上り北海をノ出て千曲川阿加川に湖る夏ノ凡五十四里川にある五ヶ月ノ清き流水の一片に子を産つけノ后海に吸る□□水にあ□□ノ十四五日にして魚と化春に至て海に入生長□□を登るを前ノのをし鮭網あるを知り遁んとしてノ河原に□□上り走るを四五間矢ノノ如くにして水に□□入る□□然れどもノ先□□魚□□にふれて倒るるを



／あれバ後の鮭皆倒て走ら□ □寄魚／と云べし  
漁夫これをと□□ 多し

十五、上段 對馬國海鼠取之圖  
下段 對馬國海鼠製之圖



- ① 八帖目 表
- ② 上段 十三版、下段 十三版
- ③ 全体に波打ち。上段「大日本物産圖會」の「物産」文字部分に赤のうつり。上段と下段の間二cm×七cm程の茶の染み。上段から下段 にかけて中央に縦皺。上段左上舟の帆右上部分に点状の赤い染み。下角左から五・五cm辺りから約八cmにわたり点々と黒い黴による染み。下段右下紫の服の人物の手

- ④ 付近に紫の色うつり。下段左上炎そばの人物の足に点々と紫の色うつり。
- ⑤ 下段中央の左墨線右側、緑「宮木印C」に青と赤の一文字暈し。海に緑と水色と灰色の重ねの一文字暈し。「大日本物産圖會」の部分桃色と岩色の一文字暈し。文章部分黄の板暈し。地面に茶と緑の一文字暈し。
- ⑥ 上段 對馬國の海鼠を取る圖  
下段 對馬國海鼠を加工する圖
- ⑦ 上段 對馬國海鼠の海鼠取ノ法あり□□□□で／最も称□すといえり沖中／にて漁するにハ□の□う／□□をつけて□し□バ自／然と入□□海底の石に／つ□□をとるにハ熱生鼠ノ汁又ハ鯨のあぶらを水／面に流せバ水底透明りて／□□口口して□□口に／て口をすら□□なり

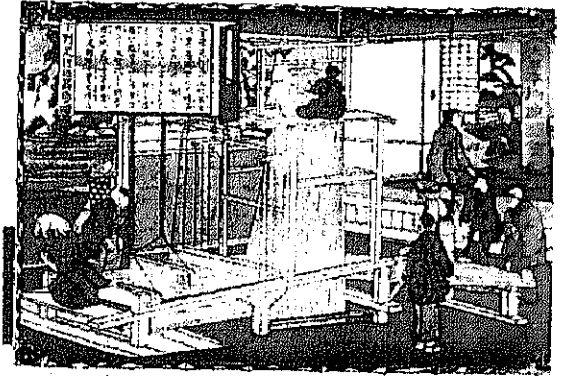
下段  
熱海鼠を口するにハ口中／三條の場をぬき空鍋に入／てつよき火にて煮るそして一日一夜にしてとりいだし／冷るを候ひ糸にしてつなぎ／て乾す又竹にさして□し／□口を串

は単といふ口單揚／ハぬきたる□□□を海水にて／數へんあらひ□に和して／収むる□□灰色にひろり／ありて揚粉のごと□□のを／上品とす魚□あ□ハトひんなり

十六、上段 下野國養蠶圖三

下段 下野足利辺高機之圖

- ① 八帖目 裏
- ② 上段 十一版、下段十一版
- ③ 全体に波打ち。上段左端人物の辺りから下段全体にかけて縦皺。下、左から四・五cmの辺りに直径一・五cm程の黴による黒染み。下、右から十cmの辺りに直径一・一cm程の黴による黒染み。左切断線右側に緑の点状の色うつり。
- ④ 上下段中央の右切断用の目安線左脇に、緑「宮木印C」
- ⑤ 地面に茶の一文字暈し。「大日本物産圖會」一部分に水色と緑の一文字暈し。文章部分橙の板暈し。出版人冊が黄色に、画工冊が赤に塗られている。
- ⑥ 上段 下野國の養蠶の圖  
下段 下野國の足利の高機の圖
- ⑦ 上段 蚕の養ひ方其國の寒暖に／よりに大同小異ありと□ども／先一枚の種子半分も生ぜし／時



十七、上段 磐城國養蠶之圖四  
下段 磐城國野馬捕之圖

- ① 九帖目表
- ② 上段 十二版、下段 十一版  
全体に波打ち。下角右から四・
- ③ 五cmの所に1cm×三・五cmの微  
による黒い染み。同左から十cm  
のところ直径1cmに微によ  
る黒い染み。上段と下段の間右  
から七cmに部分に点状の紫の  
染み。上段上青い襖の中央部に

緑の円状の染み。

- ④ 上下段中央の左切断用の目安線右脇に、緑「宮木  
印C」
- ⑤ 壁に黒の一文字暈し。壁に黒の一  
文字暈し。空、青と赤の一文字暈  
し。地面に茶の一文字暈し。文章  
部分赤の板暈し。花に赤の一文字  
暈し。地面緑と茶の一文字暈し。  
出版人冊が黄色に、画工冊が赤に  
塗られている。

- ⑥ 上段 磐城國の養蠶の図  
下段 磐城國の野馬を捕らえる  
図
- ⑦ 上段



蚕掃立□り七八日頃桑／を喰止□色少し白  
くかしら／太くなる之を獅子の居休と／いふ此  
時早く居□□を二取□／てふし明朝八時にえん  
と□□／前夜桑を喰せて居ら□を／取替べし此  
時縁通りに居□／蚕を中に置中に在りしを縁へ  
／入之棚も上下へ入之□□□／蚕一調によく揃  
ふと云

下段

馬ハ當國相馬三春の諸□／に牧場ありて産□春  
秋両度／馬とりなり狩の十日も前より／追寄に  
□□□三四日以前よりハ／人歩□八百人も出堤  
の上に／立て声をうける原中に牧士／野馬を追  
立漸□狭き野へ／追詰追巡し大勢□□にて／□

折敷へ入つて桑の葉を細／かにきざみてあとに  
之を黒／子といふ其黒蚕糸に取／あ□□を細き  
箸にて挟み別の／□に配り入ること凡種一枚  
の／蚕を三尺四方位に薄くちにし／二日目より  
ハ羽こけとて前の如く／日に三度ツ、蚕下切て  
養ふなり

下段  
當國足利又ハ上州桐生／辺にて高機を以て縹子  
／純子ホの帯地を織出□／図の如く一人高きとこ  
ろに／ありて綾をとり種々の模／様を織□□そ  
の業精／妙なり又當処より織出す／絹ハ地□ひ  
らなして美麗□／之を足利絹と云て名産と□

ひ伏せ□□<sup>フツセ</sup> 轡<sup>フツ</sup>をつけ首□<sup>クビ</sup>／尾へ太繩<sup>フトナヒ</sup>をうけて引出すこの／時近在<sup>サイ</sup>により見物群集<sup>ケンシツ</sup>す

十八、上段 岩代國會津蠟実採ノ圖

下段 同蠟ヲ製ス圖

- ① 九帖目 裏
- ② 上段 十二版、下段 十二版
- ③ 全体に波打ち。右から三・の辺りに約二十四cmの縦皺。下段右下の真座の上に直径五mmの紫の染み。下、右一cm×三・五cmの微による黒い染み。下、右から六cmの部分に一cm×二cmの微による黒い染み。
- ④ 上下段中央、右墨線左側に緑「宮木印C」



⑤ 文章部分黄の板暈し。空に水色の板暈し。空に赤の一字暈し。屋根に茶の一字暈し。花に赤の板暈し。地面茶の一字暈し。空に青の一字暈し。炎に赤の一字暈し。出版人冊と画工冊が赤で塗られている。

⑥ 上段 岩代國會津の蠟実を採る圖

下段 岩代國の蠟を製造する圖

⑦ 上段

蠟ハ日用必需の品にて山／ハゼ漆<sup>ワルシヨガノキ</sup> 天竺桂<sup>トリアライ</sup>の実等より／採<sup>トリアライ</sup>或ハ蜂の巢水蠟樹<sup>スイイボク</sup>より／取る□のあり當國にて漆樹<sup>ワケン</sup>よりとる物は十月落葉頃／実をとり白にて搗糞<sup>ソクシキ</sup>にて粉と種とを篩<sup>コシ</sup>□け大／釜の上へ木材を並べ筵<sup>シヤ</sup>を／布き楊<sup>ワキ</sup>□粉を撒し蒸<sup>チラシ</sup>／て又麻の袋<sup>アサ</sup>に入□ふさび／むして

メ木にいれ搾<sup>シホ</sup>なり

下段

□□□□□液<sup>シユ</sup>を鍋<sup>ナベ</sup>にて／溶<sup>トク</sup>し大なる桶<sup>オケ</sup>へ冷<sup>ヒヤ</sup>水を汲<sup>ツミ</sup>／その上に穴の穿<sup>ズキ</sup>たる管<sup>ハコ</sup>を／置<sup>オ</sup>きとかしける蠟を管の内<sup>ウチ</sup>に入る□バ穴<sup>アナ</sup>より漏<sup>モ</sup>れて／ひや水の中<sup>ナカ</sup>になるを／を□をもつてつよくもて／筵<sup>シヤ</sup>へちらして日光に／曝<sup>ササ</sup>しわ□ろすこと十五六／日のちたららにつめて／諸國<sup>シヨコク</sup>に出す

十九、上段 備後國蘭を植ル圖  
下段 備後國置表ヲ製圖

- ① 十帖目 表
- ② 上段 十一版、下段 十一版
- ③ 全体に大きく波打ち、左から約五cmの所に上下段にわたる二本の縦皺あり。下段には微の跡が見られ、右側には皺が見受けられる。右辺上に紺の色移りがある。
- ④ 上下段の中央、左墨線の右横に「宮木印C」
- ⑤ 上下段共に、空と地面に一字暈し
- ⑥ 上段 備後にて井草を植える様子
- ⑦ 下段 備後にて井草を用いて置表を造る様子

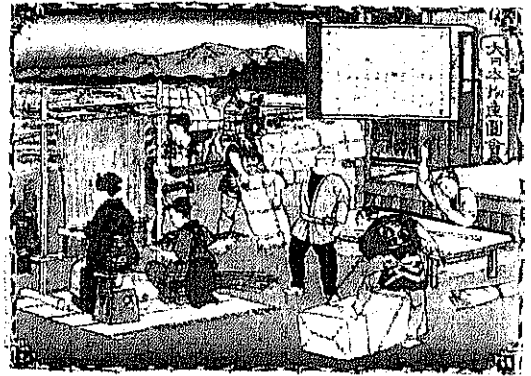
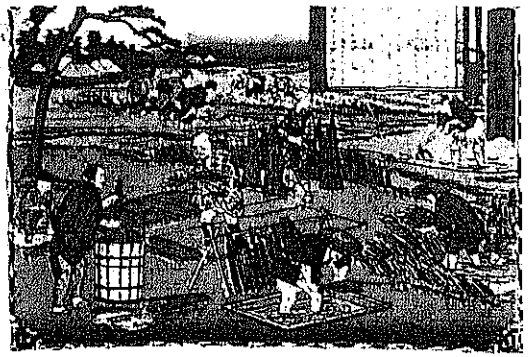
上段

□□ハ備前備中丹波近／江尾張加賀等より製すと／いへども備後を最上とす表を／織□□トランケラ  
□□石□芻乃□／種あり共に蘭と名づく□□は大きし放<sup>ハナ</sup>に表は織／て粒<sup>リ</sup>して弱しあるひは蒸／て焼<sup>ヤク</sup>となす石□□□／□して長に織て強し／品と□尤□きものを中□／して□□きを引通しと／□七□蘭なるものありて／球蘭とも云別琉球表之

下段

蘭ハ六月□とりて後その根／より生じたる新芽を秋に／至りて他の田ならつし後々肥を／入て





の色移り。上段枠内左下一三・三 cm に破れ。下段枠外右八×四 cm に黒染み。同じく下段枠外左三・五×四 cm に黒染み、また十四×八・五 cm の所に、〇・五 cm の擦傷。上段枠右下、墨書縦書『広重筆』切断。下段枠外右下、黒字瓦版方形右端枠切断、擦傷あり。下段枠外左下、画工印左端枠切断。

④ 上下段中央、右墨線左側に緑「宮木印C」

⑤ 空・夕日に一文字暈し。巻物型枠内に板暈し。

⑥ 上段 周防国にて、香草なるものをつくっている図。

下段 同国において岩草を採取している図。

て打ち蔽く再列□ハ三日を経て草発生ス

下段

石耳ハ岩上の湿気ある所に自然に生ずるものにして皆山上の所に生ず形木耳に似て甚だちひ／さく松の□の如し黒色にし／て莖なし□を採るにハ梯をうけ繩にす□り或ハ春にのり／木の枝より釣下り其危きを猿の木□□□如くなり

翌六月土用には口とる之／さて土中に穴をほりて石の箇／に白土を水に和しその内にて／口とすり□目にさらし□／口をえらびにめ糸を経糸／として機にうけており上げ／立□を去り□□枚づく／白つちをふりてよくする／の□□□つく□をして□／□□いだす之

二十、上段 周防國香草製之圖

下段 同國岩草採之圖

- ① 十帖目 裏
- ② 上段 十版、下段 八版
- ③ 上段枠外右六 cm の所に黒染み。上段人物手に紺色

香草ハ柯樹の朽てる材より自ら然に生じると□も世に給するに／□□□枚に人工を以て製する／□彫し則柯樹□儼シテ□□／の材を切り斧を以て傷をつけ／捨重ねる三年而全別の朽腐／を除き林中に列へ建架をく／□ハ春□に品て香草を発／生す是を収て後材を水に／浸し取出して木槌に





二十一、上段 越中國鐵物細工之圖

下段 越中滑川大鯨魚之圖

① 十一帖目 表

② 上段 十二版、下段 十版

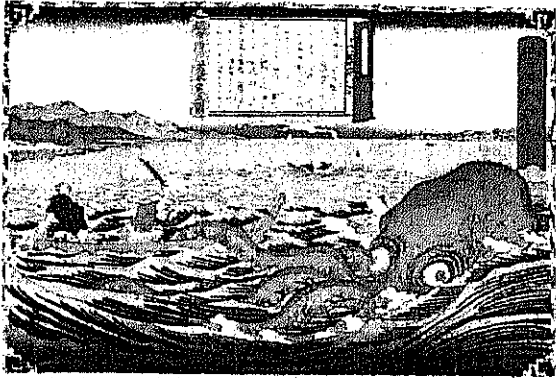
③ 欄外瓦方形印内に「明治十年八月十日御届」の記述。画面全体に大きな波打ち。上段の画面中央下に浮きあり。また、その欄外右に縦一cmほどの墨の汚れ。下段の画面中央よりやや右上に浮き、それよりやや右上に波打ち。

④ 上下段の中央、左墨線右側に緑「宮木印C」

⑤ 上段は花と夕日に一文字暈し。下段は空、夕日、海に一文字暈し。たこの吹き暈し。

⑥ 上段 越中国にて鉄物細工を作る図。

⑦ 下段 越中国にて大鯨を捕獲しようとする図。  
上段



鐵物は新川郡龜谷村ノより産す職士鎔シ煨へてノ

火鉢鉄瓶及鐵鎌口を製スノ殊に高岡にて製する仏

ノ具その他の物品其製良ノ工にして鳥獸草花の毛

彫細密なり就中内國勸ノ業博覧会への出品の

花瓶ノハ頗る精妙にして賞牌ノ口ハいりしと云

下段

当国富山滑川の大鯨は牛馬ノを取喰ひ漁船を

覆して人をノ取是り漁ノ是を捕ふるに術なノ

し故小舟中に空疎して待ノば鯨そぞひよつて

足をのべてノ舟に打ち上ると目早く鉈をノ以て其

足を切おとし速に漕久ノる其危きを生死一

瞬の間にノ関る右足を市店の簷に掛けノば長く

たれて地にあたる又疔一ツと服

して一日の食に足るといふ

二三、上段 伊予國鷹捕之圖一

下段 鶴鷹之圖二

① 十一帖目 裏

② 上段 十二版 下段 十一版

③ 左角に紙の摩耗が見受けられ、全体に大きく

波打つ。また、左下角には虫食

いの跡がある。

④ 上下段中央右墨線の左横に緑「宮木印C」

⑤ 上段下段共通、空に一文字暈し。上段の山肌には吹き暈し、岩肌に重ね。下段は山肌に重ねが用いられている。

⑥ 上段 伊予國にて仕掛け網を使って鷹を捕獲する

図。

下段 同國にて鶴鷹を捕らえる図。

⑦ 上段

鷹を捕るには張切網というノ羅の目二寸にてせず

糸を以てノ作り堅四尺よ口二間なりたるノを鷹触れ

は縮寄ようにノ張てその下へ提灯羅とて三尺ばノか

りの丸網の中へ、鴨ノ入口きノかたわらに蛇のかた

ちを木にてノ造り竹のつづに入糸をながくノつけて

夜中に仕うけ口口早天ノに鷹木末を出るとき陀の糸

ノを引鴨の方を目がけて動かせば恐ノれて口立を口

て鷹是をとらんノとして羅にかかるをとるなり

下段

鷹ハ甲斐日向丹波伊予ノ等にて捕るものは皆小

鷹ノにして奥州にて捕るものはノ大たるなり白

鷹ハ朝鮮よノり来りて鶴鷹をとるものノなり鷹

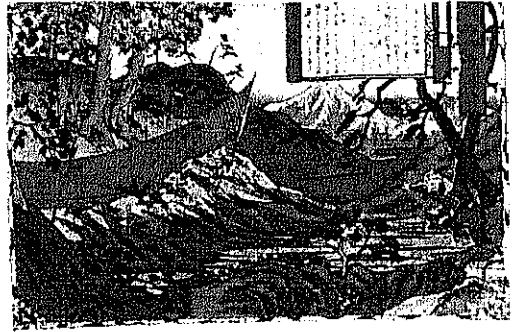
を養ふには朝鮮ノを口とし本朝にてはノ七代

仁徳天皇の御守阿ノ右といふ人初て鷹を献ノせ

し時に百濟の皇子酒君ノをして是を馴さしめ遊

ノ獵に諸鳥をとらしむ是則ちノ我朝にて鷹を養

ふの始之



二三、上段 讃岐國白糖製造之図

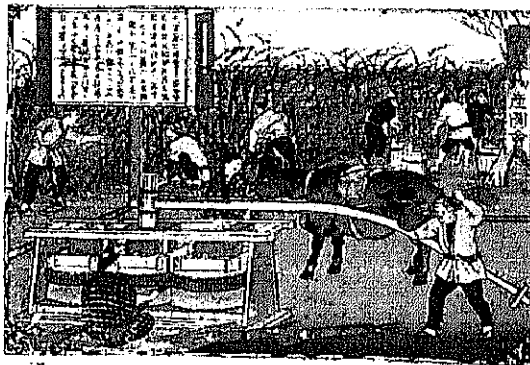
下段 同盆糖製造之図

- ① 十二帖目 表
- ② 上段 十版、下段 十版
- ③ 全体に多く波打つ。上段の空の部分に点々と黒い色写り。上下段中央の「宮木印C」の左に点状の藍色の色写り。下段小冊「白下を布に包ム」のつく人物頭部上に二・五cmほどの茶色の色写り。同下段の右上灰色の壁面部分が直径約三mmの円形に色が剥落している。下段の画題名冊「大日本物産図会」の下部に藍色の色写り。
- ④ 上下段中央、左墨線の右横に緑「宮木印C」
- ⑤ 上下段ともに、画題名「大日本物産図会」の冊に

- ⑥ 上段 讃岐にて白糖を製造する様子。  
下段 同国にて三盆糖を製造する様子。
- ⑦ 上段 夫甘口を培養する地ハ伊勢ノ尾張  
駿河紀伊阿波土佐ノ肥前讃岐薩摩口口就  
中ノさぬきの白薩摩の黒糖ノハ國中第一と口甘口ハノ  
蜀黍に似口口の長サノ一丈余あり立  
冬乃ころノ種口をにせて春日移植シ  
ノ冬至に折採り牛に引かせてノ石車  
にて搾る甘口二百五十目一日搾る  
を二人の業と口

搾る斯するノを五回して三盆糖を得残りたるノ荒蜜  
にて白糖三十斤を口口ノ残の蜜ハ二番蜜と云て諸方へ  
出ス

下段 搾りたる汁に蛎灰を和しノて荒釜  
にて煎じあくノをとること数回にし  
てノ白下とする三盆ハ白下百下をノ  
九個の布に包み船にへてノ重石をう  
け荒蜜を口口ことノ一書一夜翌日取  
出してトキ板ノにて練り又布に入て



二四、上段 土佐国鯉釣之図  
下段 同鯉節を製入図



① 十二帖目 裏

② 上段 十一版、下段 十一版

③ 全体に大きく縦の波打ちがある。上段の下部、下段の右方にも波打ちが見られる。また、左下角が六mm程度破れている。また、下段の煙りの部分(右から七・十cm)に摩擦によって傷ができています。さらに、下段の中央の人物脚部、左側人物左腕部に色移りがある。

④ 上下版中央の右墨線の左側に緑「宮木印C」

⑤ 上段 空の部分で青色が下に向かって赤色が上に向かって一文字暈し。また、海の部分は緑色で上に向かって一文字暈し。そして、砂浜は緑色で左上に向かって一文字暈し。さらに、題字「大日」

本物産図会」のところにふき暈し。

下段 海の部分は緑色で上に向かって一文字暈し。また、砂浜も緑色で上に向かって一文字暈し。さらに、煙の部分は、黒で右一文字暈し。また、題字「大日本物産図会」のところにふき暈し。

⑥ 出版人冊と画工人冊が黄で塗られている。

⑦ 上段 土佐国において釣った鯉を用いて鯉節を製造する様子。

⑧ 下段 土佐国において釣った鯉を用いて鯉節を製造する様子。

⑨ 上段

鯉は外海の諸国に採るといえへ／ども土佐口にて出すを名産と□／釣多し其時を選むといへ／ども三四月頃を初鯉とし／て春鯉の上品と□生□□を／飼うとして一艘に十二人のり込九／計なり先つ生□を夥しく／集る其中へ針に□の尾を／さして投人口ば忽ち食つきて／ユウウヨ／猶予のひ□るく引上る之

下段

□魚多く集まる□は□牛の／角鯨の牙等にて□るくし／て釣る□をうけると云なり／つりたる魚を渚の砂上□／ほうり上げ先つ頭を断り／傷をぬき骨を除き二枚に／おろしたるを又二つに切て／四片となし籠にならべて／幾重も□大口の沸湯にむして賣の子

へなら／べ三十日ほどほしてふたたび□て□へつめ諸方へ／積出すなり

二五、上段 安芸国嚴島楊枝ヲ粥□図  
下段 同広島牡蠣番養之図

① 十三帖目 表

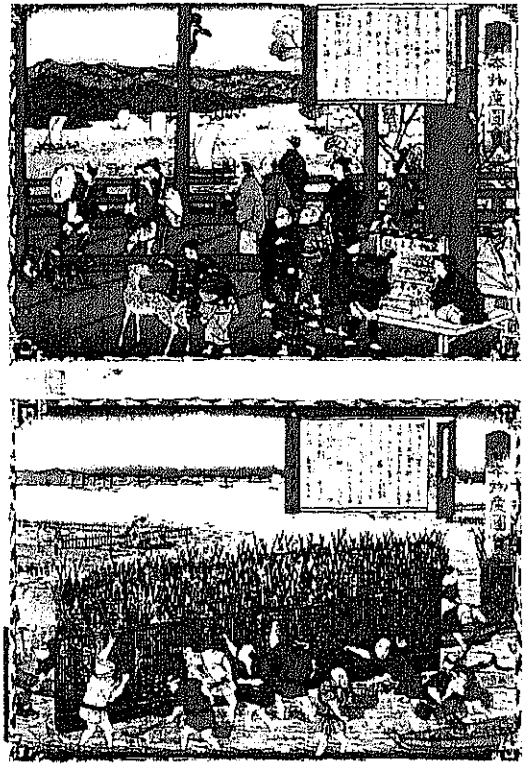
② 上段 十版、下段 十版

③ 全体に大きく波うちがあり、左から二・八cmの位置に三十一cmの上下段を縦断するしわがある。上段と下段の間の左方にと、中心からやや右よりの部分にも縦約九cmの紫色の霧を吹いたような汚れが広がる。また、右から四・八cm、上から七・二cmのところに緑の顔料をたらしたような汚れ、右から六cm、下から五・七cmのところに直径約五cmの茶色い付着物、上段の右下に直径約八cmのしみがある。さらに、左から五・八cm下から十二cmのところと小さな赤い色移りがある。

④ 上下版中央、左墨線の右に緑「宮木印C」

⑤ 図外の出版人および画工名の冊に赤版が捺されている。上段の空には青と赤の一文字暈し。図中右手奥の桜に赤のあてな暈し。上下図とも右手のシリーズ名が書かれた冊に赤と緑のあてな暈し。その左手巻物型冊内に赤の板暈し。海に青の一文字暈し。境内の板間に茶の板暈し。

⑥ 上段 安芸国において嚴島境内で楊枝を売る図  
下段 安芸国において牡蠣を養殖する様子



⑦ 上段

芸州巖島明神は日本三景のうち／にして堂社の

創建景色目を／驚かす就中大經堂は関白秀吉公の

創建にして桁筋梁間五尺／余縁幅八尺四方らんうんと付くり／俗に千疊敷といふ前面海と望む尤も絶景  
 □堂中に商ふ／楊枝は柳にてつくり五色の色／をそめて□□美にして／島中の名産として又数千の／

猿鹿群遊してよく人になれ／人にをふて餅を食す

下段

蠣は貝中の一等にして人身に／もろとも滋養の物なり海中／自に生ずるものにして大なる

／もの八岩に如く集合して／二丈に及ぶ芸  
 □に畜養す／るものは小なりといへどもその  
 味ひ／美なり千潮のとき砂上に竹木にて垣  
 をつらね潮のきたる毎／にちひさき蠣のつき  
 たるを／とう別にいけすのうちの砂／中に  
 畜養し三年目にし／て取出し

食用に□□

二六、上段 北海道函館 氷輸出之圖

下段 千島國

海瀬採之圖

- ① 十三帖目 裏
- ② 上段 十二版、下段 十一版
- ③ 全体に大きく波打ち。版の右上角および左下角に紙の磨耗。同左上角に茶色の染み。また、下辺に微。



- 上下段中央右墨線付近に約四・五cmの斜めに走る貼り皺  
 広重筆、出版人、画工の銘記の一部が切断。上下段中央の右隅線の「宮木印C」上に、十四帖目の同印が写っている。上段面の左上に約二cmの紙の破れ。「大日本物産圖會」の「本」に虫食い。下段画面題名に赤の色とび。右手上の巻物型冊の左横に、異物の付着。図中水面に茶の色とび。
- ④ 上下段の中央右墨線の左に緑「宮木印C」
- ⑤ 上段の空、山すそおよび地面に灰色の一字暈し。また、山頂、煙にはそれぞれ緑と灰色の板暈し。山の波付近の空に赤の一字暈し。画面名冊中に黄色と藍のあてな暈し。また、右手上の巻物型冊中に藍のあてな暈し。下段 般に青と赤の一字暈し。又、画面名に木と青の宛名暈し。右手上の巻物か他殺中に愛の宛名暈し。
- ⑥ 上段 北海道において氷を輸出する様子  
 下段 千島國において海瀬を小舟にて狩りを

する様子

⑦ 上段

氷ハ嚴寒の節北海道五稜岳ノの堀水の氷たるを  
鋸を以て凡七目方二十目□□□□  
二個合して雪車ニ乗せ函館港を運轉なしノ  
大鋸屑にて覆ひ箱に入レノ密封して横濱東京その外  
諸国へ輸出して氷蔵□□納め暑中に□□て販  
賣ス

下段

海獺(其毛柔にして指をの□□てノ書□□に少時其形  
ちを存すノ皮を帽に造りて人の賞するノ所□千島  
得撫島に多くノ産す土人全体革を以て造しノ  
錠節型なる船に體の入るべきノ程の穴を三ヶ所  
穿け船乃ノ中へ水の入らぬやう穴□□ノ革を□□に  
結付一人にノ權をのち兩人のりにて海上ノに浮む海  
獺を突とるなり

二十七、上段 木綿ヲ摘採ル図

下段 河内木綿織機之図

① 十四帖目表

② 上段 十版、下段 十一版

③ 全体に大きく波打ち、上辺と左辺下には虫食いの  
跡がある。右辺の下には紙の摩耗が確認される。

上段図中の地面には紺の色移りがあり、下段図に  
は右手前の犬に紺の、犬の左手の人物横に紫の色  
移りが認められる。また、人物の顔にも赤の色移  
りがある。同じく下段図の左手男性の顔には緑の  
色移り、着物には紺の色移りがある。上下の図を  
またぐようにして立ての折れ皺がある。出版人  
画工が磨耗して薄れている。特に画工に関しては  
文字がほとんど消えている。

④ 上下段中央、左墨線の右側に緑「宮木印C」  
上段は、空と地面に「文字暈し」が用いられ、屋根  
には吹き暈し「文字暈し」が用いられている。下段は地面に「  
文字暈し」が用いられている。

⑤ 上段 河内の国において木綿を摘み取る作業

⑥ 下段 同国において摘み取った木綿で機を織る様  
子

⑦ 上段

□草綿ハ蚕に次□糸にと  
りノ布に製し人間の用と  
なすノ一と廣きものなりま  
づ四月の中ノに種を蒔て五  
月に至りてノ苗四寸六月に  
いたりて□を生しノ七月中  
より追々花開き八月よりノ  
桃□□くし九月に至り実開  
きてノ綿□あらたに毎日巡  
りて次第にノ取集め晴天に

干して収むるもの之

下段

□干したる綿□糖櫃にうけノ実□とり弓に掛て□□  
げノ竹の管に巻て綿筒としノ糸車にて糸を□し  
□に掛ノ□より取て湯にさらしノに掛てあやをりと  
織機りノかけて織とる之□一反用ひる実ノ綿六  
百目にして種ノ目方三百ノ九十目□揚のへり十□  
にしてノ二百目の反物出来上るなり



二八、上段 但馬柳行李製圖  
下段 同國野蠶養之圖



- ① 十四帖目 裏
- ② 上段 十五版、下段 十三版
- ③ から十四cmの位置に約二十四cmの上下段を縦断するしわがある。また、最下部に右から八cmのところと四cmのところにカビが生えている。また、上段、右下隅の人物の横に茶色が、下段右下角に青が色移りしている。全体に波うちがあり、さらに、右上角がよれている。
- ④ 上下段の中央、右墨線左に押されている緑「宮木印C」が右に九十度回転している。
- ⑤ 上段 空の部分が赤色が上に向かつて一文字疊しが

- ⑥ 用いられ、また、かさの部分に濃い茶色であてなほかしが使われている。下段は、一文字ぼかしが使われている。空の部分が青色が下に向かつてぼかされている。また、湖の部分が左上と右上から湖の中心に向かつて青色から水色はぼかされる。そして、地面の部分は緑色で上に向かつて、小屋の屋根の部分は茶色で下に向かつてぼかされる。
- ⑦ 上段 但馬の國で柳行李を制作する職人の圖  
下段 但馬國における養蠶の圖

ヤナギヨリ  
柳 □ □ は城の崎群豊 / 岡より多く出 □ 柳の / 枝を細割し晒して行李 / を編み □ 或は葛籠弁当 / □ □ □ を作るその精 / 強して速地啓行くの用 / に供す □ 使用をな / すものなり

下段

野蚕は春蚕と異なり其養法 / 甚だ易し □ を養ふ山飼桶飼 / の二法あり山飼い雑木を悉入 □ / □ 櫻桶 □ の樹上に虫を養 / ふ桶飼い四斗槽それを □ / 蓋をして中央に □ を穿け / 櫻槽示の小枝をさし □ 内に / 飼ふ □ 小枝水共に □ 取る □ 汎 / 六十日目に繭を作る □ 五六 / 日にて蛾出る □ □ 卵を産す

二九、上段 下総國醤油製造之圖  
下段 同西瓜畑之圖

- ① 十五帖目 表
- ② 上段 十三版、下段 十三版
- ③ 上段は、画面全体に大きな波打ち。画面外左上に紺色の三つの染み。画面外右上から下へ六・五cmに赤い汚れ。画面左切断面に上から下まで擦れたような汚れあり。画工名の損傷が著しい。上段と下段の中央部余白部に右から四・七cmに横線状の青い汚れ。同じく、左端から八・七cmに黒色の汚れ。下段は、枠内中央一・二cm、二・五cmの二箇所横にのびる黴。画工、出版人の銘文は切断されずにほぼ完全な形で残っている。
- ④ 上下段中央、左墨線右側に緑「宮木印C」
- ⑤ 上段の右上上の巻物型冊中に黄緑のあてな暈し。建物内壁面に灰色の板暈し、および灰色と茶の重ね。左上上の空に青と赤の一文字暈し。下段の空に藍と赤の一文字暈し。山肌に緑と黄緑、黒の重ね。左手木の幹に水色と灰色の重ね。
- ⑥ 上段 下総國にて醤油を製造する圖。  
下段 下総國にて西瓜畑で収穫する圖。
- ⑦ 上段  
醤油 □ 葛飾群野田 / 海上銚子等より出すを / 夥し小麦を炒り大豆 / に和して麴と □ □ □ 塩 / を □ □ □ して大桶にいれ / 熟せし □ □ 布の袋に / 包 □ □ □



中央にはしみがあ  
 ④ 上下段中央、右墨線左側に  
 緑「宮木印C」  
 ⑤ 上段は空に一文字暈し。題  
 名に吹き暈し。下段は空と地面  
 に一文字暈し、脱穀機に重ねを  
 もちいる。出版人の冊にのみ赤  
 色で着彩。  
 ⑥ 上段 肥後国にて田植をす  
 る様子。  
 下段 同国にて稲刈りをす  
 る様子。



□器に入れて搾り樽／に□□諸国に出す就中／  
 野田の萬上品にして八升六／合入りを一樽と定  
 む

下段

葛飾群千葉の両郡にて／□□畑に作る蔓草／に  
 して実の大きさ冬瓜／のこく七八月のころ熟  
 ／し其□と皮ハ青黒色、／もつて中ハ数色なりま  
 た／外皮白青色にして中／黄なるものあり水多  
 くし／て味甘し暑熱を消す／ものなり

三十、上段 肥後國田植之圖

下段 同刈揚之圖

- ① 十五帖目 裏
- ② 上段 十二版、下段 十一版
- ③ 上段に紺の色移り、下段に黴の跡がある。上段下  
 方に赤の色移りが小さく5個所ある。上下段中

⑦

上段

皇國の米産地球中第一等と□／就中美濃肥後伊  
 勢尾張遠／江肥前日向山城大和駿河伊／豆近江  
 三河を上等とす米に／粳糯の二称にして八十八  
 夜／前後に種子を俵に包み池沼／に十五六日浸  
 し水より揚て湯／を漉ぎむしろを□□ひ芽ニ／  
 分ほど経て苗二四寸のびた／るを玉苗といひて  
 これをうえ／つけの期とす

下段

農家の婦女子笠を併へ袖をたば／ねて唄をうた  
 いて苗を□たる見を／早乙女という物うえ付の  
 後度／々□入口をして秋に至り花／も散り穂も  
 そろひて用水を抜／日光に田を干て鎌を以て刈  
 ／とり竿にうけて五日ほど干し／□□にてふき

おとし□扇に／とおし節にうけ□さとう□に／

て精粗を区分し木白にうけ／てすり□て万□□  
 にて精／粗をわけて升に斗りて俵／にをさむ

三一、上段 日州線製之圖

下段 日向國樟製之圖

- ① 十六帖目 表
- ② 上段 十二版、下段 十一版
- ③ 全体に大きく波打ち、左から約十五cmのところ  
 には上下段にわたる立ての皺がある。上段中央に紺  
 の点状のしみがあ、下段左から約八cmには虫食  
 いの跡がある。下段中央部の雲の中に緑色の色移  
 りがある。左辺の画工名は摩耗し、上下2図の中  
 央には小さなしみがある。
- ④ 上下段中央、左墨線右側に緑「宮木印C」





の二ノ種有り則樟の根を細末ノに口すり釜に  
 入て煎じ出ノして釜の上に冷水を入れたるノ  
 箱をおき釜中湯の騰にノ随ひ蒸発して箱の  
 底凝ノ着して口口樟腦之支那人是をノ精製し  
 て龍腦とよぶといふ

三十二、上段 志摩國荒布刈之圖

下段 同國五色砂口盆石飾

荒布ハ其形ち昆布に似てノ薄ク柔にして黒色な  
 りノ富國鳥羽の海底口他口々ノに生ず土人鎌を  
 以て海底にノ沈み岩に付口口荒布乃ノ根を刈て  
 浮むあらめ浪のノ為に自然と陸地へうちノあげ  
 たるを取まとめ乾ノして所方にい口す

下段

當國鳥羽口産する砂は口ノ色数種あり青黄赤白  
 黒ノその他数色を製口放到口ノ砂を以て盆石盆  
 面を畫すノる利黒塗の盆中口諸ノ国々名所花鳥  
 山水好口ノノ如く色砂を以て彩色しノ床の間乃  
 重物額面或はノ紙上に砂を止て掛物口口ゑ口

① 十六帖目裏

② 上段 十一版、下段 九版

③ 画面全体に波打ち。上段枠外左隅から右へ約一・  
 五cmの所から右斜め下へかけて細い虫食いの様  
 な欠損。画面左下、緑色の着物を着ている人物の  
 首から手元へかけて茶色い紙が付着。上段枠右下、  
 墨書縦書『広重筆』切断。下段枠外右下、黒字瓦  
 版方形、右端枠切断。下段枠外左下、画  
 工印、左端枠切断。

④ 上下段中央、右墨線左側に緑「宮木印C」

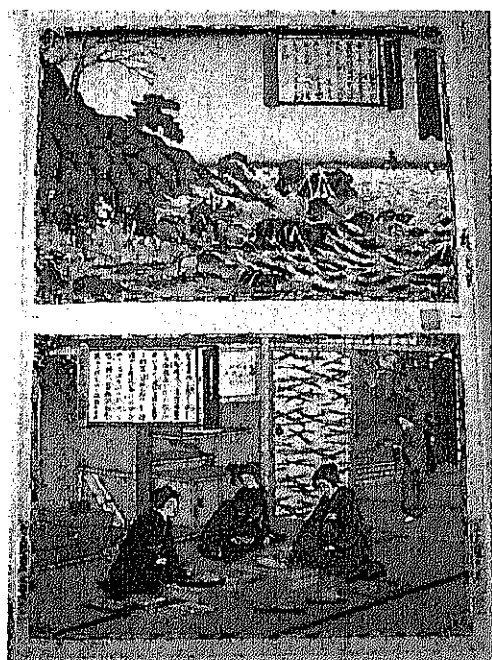
⑤ 上段は空と夕日の表現に一文字暈し。岩  
 壁と水に板暈し。下段の右手椽に暈し。  
 灯笼に水色と灰色の重ね。左手壁に灰色  
 の一文字暈し。

⑥ 上段 海を後に浜辺で人々が荒布とい  
 う海藻

を拾っている図。下段 室内にて婦女子

⑦ が五色砂を用いて盆石を飾る様子。

上段



⑤ 上段は空に一文字暈しを用い、山肌に重ねを用い  
 ている。下段は煙に吹き暈しを用い、土肌には重  
 ねを、空には一文字暈しを用いている。出版人冊  
 が黄で、画工冊が赤で塗られている。

⑥ 上段 日向国にて緑磐を製造する様子。

下段 同国にて樟腦を製造する様子。

⑦ 上段

緑磐ハ山谷より磐石を堀ノ出し則ち白きハ  
 明礬とるしノ其色青きを粉にして水をノそそぎ  
 蒸発しざるを伺ひノて是を釜に入れてせんじノ  
 その泡をとりて乾したるノこと口なり上等ハ  
 紺手とノ呼て薬用とし下等ハ浅ノ黄と呼てに  
 染汁用ゆ

下段

樟腦ハ富國宮城郡諸村ノにて製す楠に楠と樟